

あさぬま こういち
浅沼 弘一

大安売り

●電機連合・書記長

年末年始のこの時期の大安売りは、年中行事であるが、最近では年末年始の大売りに勢いがなくさびしい。その理由は、この時期に限らず、年中大安売りになっているからではないだろうか。

百均と呼ばれる100円ショップでは、年中あらゆる物を100円で売っている。品質はともかくとして、何でも100円である。衣料品で言えば、小売りチェーン店で、高級素材であるカシミア100%のセーターが1万円しない値段で売られていることに驚いた。自転車なんてホームセンターに行けば、5,000円ぐらいで売っている。電気製品に至っては、大型量販店で他店の安い値段に追随して値引きしてしまうので、際限なく安くなってしまう。55インチのプラズマテレビが、配送・設置作業込で15万円という値段で売られている。1インチ1万円が普及の目安とされていたことから考えると、1インチ3,000円弱という

のは驚きであり、恐怖でもある。

日本国における物の値段はどうなってしまったのか。

もちろん、メーカーや流通業者が製造段階や流通段階におけるコスト削減を徹底して行い、価格を下げる努力をしていることは理解する。しかし、度が過ぎやしないか？

カシミアセーターが安くできた理由についてはHPで説明されていた。このように値段を下げられた理由が明確になっているものは安心である。しかし、中には、発展途上国の極めて安い賃金と、命さえ落としかねない劣悪な職場環境で働く労働者に支えられて、安い価格を実現しているようなことも十分考えられる。売る側は言うに及ばず、買う側の責任も感じざるをえない。

安い自転車のほとんどは、もちろん日本製ではない。自転車の普及率が非常に高いデンマークでは、自転車の値段は、消費税が高い



こともあるが、最低5万円はした。ただ、つくりがしっかりとしているので、中古市場も充実しており、中古自転車は安価に手に入れることができる。5,000円の自転車は、素人目にも雑な溶接をしたフレームを使っていたりするため、耐久性が心配である。さらに、その安値も、生産した国の中の大幅な賃金格差によるものではないかと考えると、安易に安いからと買うことに抵抗感を感じる。

プラズマテレビは、15万円なら明らかに原価を割っている。おそらくはメーカーが赤字覚悟で出荷しているのであろう。価格が、その原価によって決まるのではなく、流通段階で決まるからこういうことになるのである。この安値は隣国のメーカーの製品価格に引きずられている。メーカーの中には、働く人の権利を無視して、労働組合の活動に圧力をかけ、組合つぶしを公然と行い、働くものをすり減らして使うような、国際的にも非難され

ている企業もある。そんな企業の作った製品によって、我々の作った製品の価格が決められるということに怒りさえ覚える。

先日参加した勉強会でも話題になったのだが、長きにわたるデフレ経済に慣れっこになっていて、我々は物の価値と関係なく価格が下がることに無頓着になっているように思う。価格はマーケットが決めるという×型のグラフにもとづいた理論など、この状況では通用しそうもない。

あえて厳しい言い方をすれば、安いからいいだろうというのは、あまりにも無知であり、無責任である。新年から重いが、東アジアのリーダーとなるべき日本国が、その価値を安売りしてはいけないと改めて思うところである。